

2015 年度立命館大学校友会 東日本大震災復興支援事業 東北応援ツアー レポート
「現地を訪問して想うこと」

参加者氏名：謝博浩

卒業年：2015 年

卒業学部：国際関係学部

参加コース：C 岩手県コース

私は 11 月 22～23 日の二日間、立命館大学校友会の東北応援ツアーの岩手県コースに参加した。今回のツアーに応募したのは、東日本大震災の被災地の今の様子をこの目で見たかったからだ。2011 年の震災以来、東北の太平洋側を訪れたことがなかった私にとって、今回のツアーは、被災地の現状や東北の良さを理解する絶好の機会となった。この二日間で考えたこと、感じたことを以下に報告する。

ツアーの一日目の午後、私たちは釜石から盛駅の間を走る三陸鉄道の震災学習列車に乗車した。震災後のこの列車の運行は、中東の産油国クウェートからの支援によって支えられている部分もあり、車体には日本語とアラビア語、英語で感謝の意を示すメッセージが書かれていた。一時間という短い時間ではあったが、現地の方による解説も聞きながら、沿線の町の様子を車窓から見る事ができた。ここで印象に残ったのが、町によって被害の状況や復興の進捗が大きく異なっている点だった。沿岸部まで商店や住宅地が広がっていた町ほど人や建物への被害が大きかった。一方で、100 年前の三陸津波の教訓より、沿岸部はすべて田んぼや畑に、住宅はすべて海から離れた高いところに建設する計画を実施していた町では、人への被害が大幅に抑えられた。過去の教訓から学ぶべきだということを実感させられた。

その日の夜、陸前高田市のキャピタルホテル 1000 というホテルに宿泊した。ここは震災後に高台に移転されたホテルで、客室からは陸前高田市の街並みや海が見渡せた。陸前高田市というと、津波で壊滅的な被害を受け、広範囲がさら地になってしまった町だ。震災後の報道で何度も映像で見たのを記憶している。その陸前高田を初めて訪問したが、一番衝撃的だったのが、震災から四年八か月以上たっても、いまだに仮の盛り土が集められただけで、建物の建設などがあまり進んでいないことだった。高台からよく見えたのだが、沿岸部の広い範囲は茶色の盛り土が積み上げられたままで、夜は真っ暗であった。どうやら、どこに何を建設するか、町全体のかさ上げをするかどうか、などで折り合いがついていない部分も残り、いまだに街の復興計画が定まっていなかった。難しい問題であることは間違いないが、被災から四年八か月以上たってもまだこの状態なのは衝撃的だった。このように、まだまだ復興は思うように進んでおらず、課題が山積みである。被災地に対するメディアの関心は薄れつつあるが、実際に被災地に足を運んでみると、この状況から目を背けることは道義的にありえないと思った。同じ日本に住む一人一人が、東日本

大震災の被害を受けた地域へ高い関心を持ち続けなければ、真の復興は成し遂げられないだろう。

進捗の遅れる復興など、困難な面をいくつも考えさせられたが、今回のツアーでは、おいしいお酒や海産物、岩手県の豊かな文化などの明るい面も感じる事ができた。地元で味わう地酒やお刺身は格別においしかった。一日目に訪れた遠野伝承園では、昔ながらの住まいの様子やこの地方で生まれた伝説などを知ることができた。二日目には、中尊寺金色堂を訪れ、黄金色をふんだんに使って作り出されたきらびやかな世界観に圧倒された。こういった、東北のいいところを訪問したり、おいしいモノを消費したりすることも、立派な被災地貢献だと思う。今回のツアーで感じたことや出会った素敵なものなどを周りのたくさんの人に伝えていきたい。